

令和 5 年 5 月 15 日現在

機関番号：13401

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K20818

研究課題名（和文）学びのサイクルに準拠したカリキュラム研究の創発

研究課題名（英文）Emergence of curriculum research based on learning cycle

研究代表者

木村 優（Kimura, Yuu）

福井大学・学術研究院教育・人文社会系部門（教員養成）・教授

研究者番号：40589313

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、教師が子どもの実態に即した教育実践を実現するための、学びのサイクルに準拠したカリキュラムデザインの理論枠組みを導出することを目的とし、同サイクルの解明を研究主題に掲げる2つの学校：福井大学教育学部附属義務教育学校・新潟大学教育学部附属中学校と協働生成的アクション・リサーチを実施した。結果、「対話するカリキュラム」によってカリキュラムデザインに対する工学的・経営学的アプローチの呪縛、自らの確立された実践経験への固着から教師は解放され、社会文化的な教育要請を踏まえながら、子どもの学びのサイクルに即してカリキュラムを柔軟に変化・刷新・創造するカリキュラムデザインの理論枠組みが導出された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の完成により、カリキュラム研究でこれまで繰り返しその転換・精緻化が訴えられてきた「工学的アプローチ」と「経営学的モデル」に対抗する、学びのサイクルに準拠した教師のカリキュラムデザインの理論枠組みが創出された。この理論枠組みを用いることで、学校・教師はPDCAに象徴されるカリキュラムの目標設定・実施・測定・改善による品質管理サイクルの従属から解放されることになり、結果、多くの学校・教師が限られた授業時間の中でカリキュラム・オーバーロード、細分化された教育目標の達成追求という状況を乗り越え、自らの主体的な判断でもって子どもたちの学びと育ちを最大限に支え促すエージェンシー発揮が可能になる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to create a theoretical framework for curriculum design that conforms to the cycle of learning, so that teachers can realize educational practices that match the actual conditions of children. Generative action research was conducted. As a result, teachers were liberated from the constraints of engineering and management approaches to curriculum design and their own established practical experiences through the "Dialogic Curriculum," and were able to flexibly change, renew, and create curriculum in line with the cycle of children's learning, while taking socio-cultural educational needs into consideration. A theoretical framework for curriculum design based on learning cycle was created.

研究分野：教育心理学

キーワード：学びのサイクル カリキュラムデザイン エージェンシー カリキュラム研究

1. 研究開始当初の背景

2000年代以降、世界各地の国や地域において知識社会の進展に伴ってAI・ロボティクスに象徴される科学技術の進歩が急速化し、超スマート社会「Society5.0」(内閣府, 2019)が立ち現れる中、新しい社会に備える高次能力を子どもたちに育む「21世紀型教育」が広く推進されるようになった(シュライヒャー, 2019)。日本では現在、子どもたちの高次能力を育む「主体的・対話的で深い学び」の実現と、現実社会の問題発見・解決を探究的な学習により追究可能な「社会に開かれた教育課程」の推進が学校教育に求められており(文部科学省, 2017)、各地の学校・教師は地域資源の活用や教育・研究機関との連携による課題探究型の教科学習や総合的な学習(探究)の時間のカリキュラム開発に着手し始めている。

このカリキュラムを巡る学校教育の現況は、「学校を基盤としたカリキュラム開発」(OECD, 1974)の拡充と捉えられ、2005年10月の中央教育審議会答申「新しい時代の義務教育を創造する」で標榜された方針が浸透した証左といえる(文部科学省, 2005)。しかし、学校・教師にカリキュラム開発の自由裁量が広がる一方で、教育の政策・実践・効果という重層性をもった複雑なカリキュラム開発をガイドする理論枠組みは、カリキュラム研究でこれまで繰り返しその転換・精緻化が訴えられてきた「工学的アプローチ」と「経営学的モデル」が未だ支配的であり、学校・教師はPDCAに象徴されるカリキュラムの目標設定・実施・測定・改善による品質管理サイクルに従属させられている。結果、多くの学校・教師が限られた授業時間の中でカリキュラム・オーバーロードに直面し、公立学校では市区町村が設定する細分化された教育目標の達成に追われ、カリキュラム開発の責任だけを一身に負う事態となっている(松下, 2007; Creese, Gonzalez & Isaacs, 2016; 田熊, 2016; 石井, 2017)。

以上のカリキュラム開発の課題に対し、カリキュラム研究は近年、教育政策としての「制度化されたカリキュラム」と授業を通して教師が「実践するカリキュラム」、そして子どもが「経験するカリキュラム」を連動させる「学び・授業・カリキュラム」の一体化を提唱している(秋田・佐藤, 2017)。この提唱は、図1に示したカリキュラムの近代性を巡るこれまでのパラダイム間の対立・競合・接近の構造下で生成されたものである。しかし、この新しいカリキュラム論の中では、子どもと教師の学びの分析が一回限りの授業と授業研究を対象とする短期的視座に未だ留まっており、子どもと教師の能力伸長に不可欠な「時間」の長期的視座をふまえた「学びのサイクル」を示していない。したがって、学校・教師が目の前の子どもたちの学びと育ちに即してカリキュラムをデザインするためのガイドとなる理論枠組みも描出すには至っていない。

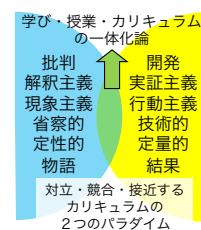


図1 カリキュラム論のパラダイム構造

2. 研究の目的

そこで本研究では、学校・教師がカリキュラム・オーバーロードを克服し、それぞれの地域と子どもの実態に即した教育実践を実現するための、学びのサイクルに準拠したカリキュラムデザインの理論枠組みを導出することを目的に定め、2020年度から2022年度に以下の3研究を実施・連動させ、学びのサイクルに準拠したカリキュラムデザインの理論枠組みを導出し、その理論枠組みに即した新たなカリキュラム研究の創発・育成・開拓を目指した。

研究1の目的は、教師が学習指導要領に示される教育課程の基準、自らのカリキュラム開発経験知、子どもの学びのサイクルの3者関係をいかに認識し実践にあたっているのかを解明することである。研究2の目的は、学びのサイクルを通じた子どもの伸長能力の実態を解明することである。研究3の目的は、学びのサイクルに応じてカリキュラムを柔軟可変する教師の意思決定過程を解明することである。

3. 研究の方法

本研究の目的達成を図るため、研究代表者と研究分担者5名による研究プロジェクトチームを組織し、学びのサイクルの解明を研究主題に掲げてきた2つの学校：福井大学教育学部附属義務教育学校・新潟大学教育学部附属中学校を研究協力校としてアクション・リサーチを実施した。

研究1では、研究協力校が同定する「学びのサイクル」を紀要・実践記録から析出する。次に、全教科リーダー教師にカリキュラムデザインを行う上で、(1)学習指導要領、(2)自らのカリキュラム開発経験、(3)学びのサイクル、をいかに活用しているのかを主に聴取する半構造化面接を行い、学びのサイクルを包摂した教師のカリキュラムデザインの認識を解明していった。

研究2ではまず、研究協力校と協議の上、両校が達成を目指す教育目標に則り、把握を目指す子どもの伸長能力にエージェンシー(Agency)を措定した。そこで、エージェンシー概念の理論的整理を行い、生徒(学習者)のエージェンシーを捉える尺度開発を行った。次に、開発した生徒エージェンシー尺度を研究協力校で実施し、研究協力校の学びのサイクルを通して子どもたちが伸長・発達させていく能力の実態を解明していった。また、生徒自身が自らの学校におけ

る学びと探究の経験からいかにエージェンシーを含めた能力育成を認識しているのかを明らかにするために、生徒自身に上記の経験と認識を語ってもらうヴォイス調査を実施した。

研究3では、研究協力校のリーダー教師たち共に、授業カリキュラムデザイン、生徒の学びの見取り、学校のカリキュラムマネジメントの3点を主としてカリキュラムを協働診断する省察カンファレンスを行った。そこでの対話と議論を分析し、学びのサイクルに準拠したカリキュラムデザインを推進するために教師たちが行っている活動システムについて検討した。

以上、研究1・2・3の知見を統合し、学びのサイクルに準拠したカリキュラムデザインの理論枠組みを構築した。

4. 研究成果

本研究の結果、学びのサイクルに準拠したカリキュラムデザインの理論枠組みの構築に資する以下の知見が主に得られた。

(1) 学びのサイクルに準拠したカリキュラムデザインに対する教師の認識

福井大学教育学部附属義務教育学校では「探究」「コミュニケーション」「コミュニティ」を鍵概念とした実践研究を進め、「協働探究サイクル」と呼ばれる学びのサイクルを描いている。新潟大学教育学部附属新潟中学校では「対話」「真正の学び」を保障する実践研究を進め、同校の研究主題に適合したOECDラーニング・コンパス2030のエージェンシー、そしてコンピテンシー発達のサイクルである「AARサイクル」を活用している。両校ではこれらの学びのサイクルをカリキュラムデザインの準拠枠に用いている(図2)。

そして両校の教師たちはそれぞれ、教科の学習指導要領や教科書・資料集と自ら蓄積してきた実践経験にもとづきながら、〈学びのサイクル〉を意識してカリキュラムデザインにあっていた。

学習指導要領に象徴される「制度化されているカリキュラム」について、教師たちは「ねらう力の確認」「チェックポイント」「位置づけの確認」「次単元の内容参照」に用い、それは「内容の確認」としての「最低限」「単元の前のみ」で「実践中はほとんど見ない」扱いであった。

次に教科書・資料集に象徴される「意図されているカリキュラム」について、教師たちは「情報の確認・把握」「学習指導要領との整合性確認」「ネタ(内容)探し」に用い、教科書・資料集を「子どもたちが開きたいように」する、「教科書をなぞらない」「教科書通りには教えない」「教科書で教える」という認識を持っていた。

蓄積された実践経験としての「実践されているカリキュラム」について、教師たちは「やろうとはする」ものの「予定通りにならない」「マイナーチェンジ」しないと「使えなくなる」という認識を持っていた。

子どもの実際の学びとしての「経験されているカリキュラム」について、教師たちが「子どもの学びの見取り」から「子どもを見ながら学びを広げる」「子どもの反応に応じて変える」というカリキュラム実践の認識を持っていた。

そして、両校の学びのサイクルに象徴される「実践され経験されているカリキュラム」について、教師たちは「潜在意識」として学びのサイクルを有しており、学びのサイクルを持つことで「子どもの学び・探究の見通し」がつけられ、「事前の授業計画からの解放」「サイクルとして可視化されることによる学びのイメージ化」「子どもと一緒に作る授業のイメージ化」という認識を得ていた。

また、教師たちは一方で保護者・子どもたちから期待としての「期待されているカリキュラム」について、「計画されているカリキュラム」である「教科書通りを求める保護者・子どもの存在」を言及し、こうした「期待されているカリキュラム」が教師のカリキュラムデザインに対する認識に影響を及ぼすことが示された。

以上より、〈学びのサイクル〉は特に、子どもたちの学びの過程における意欲、探究の深度、省察の連関に対する教師たちの意識を高め、授業中の子どもたちの学ぶ姿の見取りと厚い記述、実践中のカリキュラムリデザインの意味決定に寄与していると推察された。

(2) 学びのサイクルを通した子どもの伸長能力

研究協力校と協議の上、両校が達成を目指す教育目標に則り、把握を目指す子どもの伸長能力

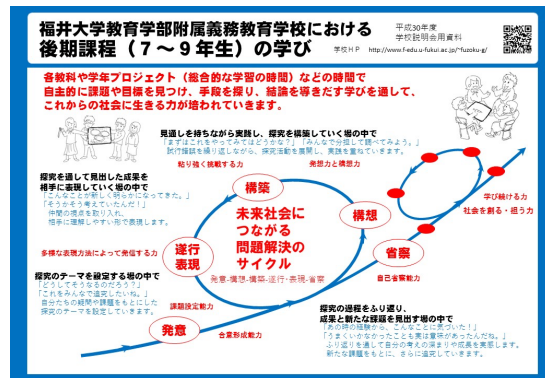


図2 協働探究サイクルとAARサイクル

にエージェンシー (Agency) を措定した。そこで、まずエージェンシー概念の理論的整理を行った。

自らの行動を駆動することで自分自身と社会に影響を与える人間の能力であるエージェンシー、その概念的なルーツは社会学にある。社会学の議論を紐解くと、エージェンシーは社会構造の変革に向けた人間の意識的で意図的な行為であり、さらに自然の仕組みとも相互作用することが明らかになった。すなわち、エージェンシーは社会・自然の構造、それぞれが相互に関わり合うエコシステム (生態系) と切っても切り離せない関係にある。また、エージェンシーの機能の心理学的考察から、エージェンシーの構成要素としての人間の資質能力として、目的意識、成長マインドセット、希望、動機づけ、自己効力感、所属感等が抽出された。すなわち、エージェンシーは学術的に多様な考えや思想によって概念としての洗練を進めながら、その通底にはいつも人間と社会・自然、そして自己・世界との関係があり、そして社会と自然のシステム、それにより形作られる自己と世界のより良い変革に向けた希望が潜在していると考えられた。また、エージェンシーの社会学的な議論から、エージェンシーは社会構造としての「沈黙の文化」の中で抑圧されている人間が、現実の状況を意識し、立ち止まって思考し始め、自らの抑圧された「声なき声」を対話の中で発していく「解放」の契機に位置づけることが示されている。これを教育学的に省察すると、教育においては単に変革を生み出す力としてエージェンシーを子どもたちに育むだけでなく、解放を実現する力としてエージェンシーを育む必要が示された。変革と解放の力としてのエージェンシーはまさに、抑圧からの解放を実現し、社会・世界、そして学校をよりよく変革するためのキー・コンピテンシーであることが明らかとなった。

以上のエージェンシー概念の理論的検討を踏まえ、上記のエージェンシー構成要素の 7 つの資質能力は学術的に広く検証されていることから、生徒 (学習者) エージェンシーを捉える尺度として、(1) 成長マインドセット (Dweck, Chiu & Hong, 1995)、(2) 希望 (加藤・スナイダー, 2005) (3) アイデンティティ (下山, 1992)、(4) 動機づけ (Kosovich, Hulleman, Barron, & Getty, 2015)、(5) 目的意識 (Sharma, Yukhynebo & Kang, 2017)、(6) 自己効力感 (坂野・東條, 1986)、(7) 所属感 (Malone Pillow & Osman, 2012) を統合する七元尺度を構築した。

これを学習者エージェンシー尺度とし、研究協力校 2 校で実施して生徒たちが伸長するエージェンシー及びその構成要素の能力を把握した。結果、福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程生徒 (N=309)、新潟大学附属新潟中学校生徒 (N=319) は平均で 7 元のレーダーチャートを分析すると同型のエージェンシーを育てており (7 元すべてクロンバック α 係数 8.0 以上)、所属感 (福井 73pt・新潟 75pt)・動機づけ (福井 72pt・新潟 73pt)・希望 (福井 71pt・新潟 72pt) の順で能力伸長の肯定評価数が高かった。その一方で、自己効力感 (福井 56pt・新潟 58pt) については他の能力に比較して肯定評価数が低かった。

以上の数量的な観点からの生徒たちのエージェンシーの育ちの検討を踏まえ、具体的に生徒たちがいかなる経験からエージェンシーを育てているのか、またエージェンシーが社会的・自然的なエコシステムの変革と解放に向けていかに協働化 (共同エージェンシーへの拡張化) していくのかを、生徒たちの声=ヴォイスから微視的かつ質的に検討した。結果、(1) すでに共同エージェンシーが発揮されている場や関係への参加と、そこで出会う人々の<声>に応じていこうとするところから生徒エージェンシーは芽生えていく、(2) 芽生えた生徒エージェンシーは、周囲の人々との共通のウェルビーイングを描くことで、より責任のある行動をとっていこうとするエージェンシーの成長へとつながっていく、(3) 生徒エージェンシーの成長が、周囲を巻き込んでいこうとする自分を中心とした共同エージェンシーの発揮へとつながっていく、の 3 点が明らかとなった。

(3) 学びのサイクルに準拠したカリキュラムデザインを推進する活動

研究協力校 2 校の研究部の会議に定期参加し、同会議において行われる対話と議論を記録し、その分析を行ったところ、両校の教師たちは学びのサイクルに準拠したカリキュラムデザインを推進する中で「対話するカリキュラム」を生成する活動をシステム化していることが明らかになった。教師たちは、多層に広がるカリキュラムの主体 (マルチ・ステークホルダー・エージェンシー) に対し、学びのサイクルに準拠した「実践され経験されるカリキュラム」の価値を伝える対話の機会を創出していた。その機会とは、研究開発、研究集会・発表会、教科授業研究会、教育課程研究会、校内研修会、子どもたちと学校を語り合う会、保護者会・授業公開・学習参加等である。この「対話するカリキュラム」の生成により、教師たちはそれぞれの主体が関与するカリキュラム間で生じるギャップを埋め、子どもたちの学びのサイクルを不断に推進しスパイラルアップさせていた。

以上の結果を統合した知見として、学びのサイクルに準拠したカリキュラムデザインの理論枠組みを描出した (図 3)。

教師が子どもたちの学びと育ちに即してカリキュラムをデザインするにあたって、長期にわたる子どもたちの能力伸長と学びの螺旋的前進を描く「能力を育むカリキュラム」の認識に結びつく「学びのサイクル」を準拠枠として保持することで、所与の「制度化されたカリキュラム」「計画されているカリキュラム」の基準、自らの「実践されているカリキュラム」の経験、「期待されているカリキュラム」の要請、これらと交渉・調整して学びのサイクルを不断に継続し刷新するのを可能にする「対話するカリキュラム」が創出される。この「学びのサイクル」を準拠

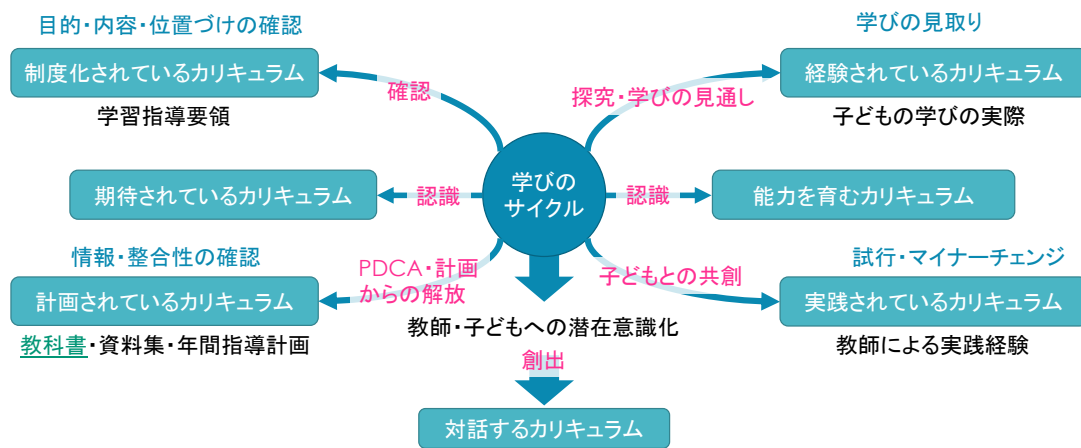


図3 学びのサイクルに準拠したカリキュラムデザインの理論枠組み

枠として創出される「対話するカリキュラム」によって、カリキュラムデザインに対する工学的・経営学的アプローチの呪縛、自らの確立された実践経験への固着から解放され、社会文化的なカリキュラムデザインの要請を踏まえながら、子どもの学びのサイクルに即してカリキュラムを柔軟に変化・刷新・創造していくことが可能になることが示された。「対話するカリキュラム」の創出とそれにもとづくマルチ・ステークホルダーとのカリキュラムを巡る対話は、教師たちが自らの主体的な判断でもって子どもたちの学びと育ちを最大限に支援し、変化し続ける民主主義社会の発展に貢献していくエージェンシーの発揮と育ちに寄与する重要活動であると考えられた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Wang, L., Kimura, Y., & Yurita, M.	4. 巻 42
2. 論文標題 One Step Further: Advancing Lesson Study Practice through Collaborative Inquiry School-University Partnerships	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Asia Pacific Journal of Education	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 木村優	4. 巻 11(2)
2. 論文標題 教育改革のグローバル・トレンドを踏まえて子どもたちの育ちすべてを支える	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 千葉学校保健研究	6. 最初と最後の頁 10-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 木村優	4. 巻 14
2. 論文標題 専門職の学び合うコミュニティPLCsの協働成熟を支える学校ネットワークとコンソーシアムの可能性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教師教育研究	6. 最初と最後の頁 21-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 三河内彰子・一柳智紀・木村 優・長谷川友香・秋田喜代美	4. 巻 60
2. 論文標題 探究的な学びを通じた生徒Agencyの変容過程の検討：中高生の『語り』にもとづく発話分析とエピソード分析	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京大大学院教育学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 663-681
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 21. 木村 優・永田卓裕	4. 巻 13
2. 論文標題 地域の学校ネットワークに基づく社会に開かれた教育課程と学校組織の協働開発のアクションリサーチ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教師教育研究	6. 最初と最後の頁 463-473
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三河内彰子・一柳智紀・木村優・長谷川友香・秋田喜代美	4. 巻 60
2. 論文標題 探究的な学びを通じた生徒Agencyの変容過程の検討：中高生の「語り」にもとづく発話分析とエピソード分析	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東京大学大学院教育学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Wang, L., Kimura, Y., & Yurita, M.
2. 発表標題 Reflective and Sustainable Lesson Study Practice through University-School Partnership
3. 学会等名 The World Association of Lesson Studies (WALS) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 木村優
2. 発表標題 「教師のコンピテンシー」をめぐって
3. 学会等名 日本教師教育学会・公開研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 木村優
2. 発表標題 探究型カリキュラム実践を通して育まれる教師コンピテンシーの探索：高校とのアクション・リサーチにもとづく教師の語りの定性的分析
3. 学会等名 日本教育方法学会第57回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 木村優
2. 発表標題 教育改革のグローバル・トレンドを踏まえて子どもたちの育ちすべてを支える
3. 学会等名 第24回千葉県学校保健学会年次大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤井佑介・木村 優・三河内彰子
2. 発表標題 探究カリキュラム実践を基盤とした教師の協働的専門性開発の構造：専門職の資本概念による学校文化成熟過程の明晰化
3. 学会等名 日本教育方法学会第56回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 アンディ・ハーグリーブス、マイケル・フラン、木村優、篠原岳司、秋田喜代美	4. 発行年 2022年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 416
3. 書名 専門職としての教師の資本	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	下郡 啓夫 (Shimogori Akio) (00636392)	函館工業高等専門学校・一般系・教授 (50101)	
研究分担者	三河内 彰子 (Mikouchi Akiko) (20838453)	明治学院大学・文学部・研究員 (32683)	
研究分担者	一柳 智紀 (Ichianagi Tomonori) (30612874)	東京大学・教育学研究科・准教授 (13101)	
研究分担者	坂本 篤史 (Sakamoto Atsushi) (30632137)	福島大学・人間発達文化学類・准教授 (11601)	
研究分担者	花井 渉 (Hanai Wataru) (60783107)	九州大学・人間環境学研究院・准教授 (82616)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関